

南米移住された県人の皆さんの歴史と現在のご活躍について

県では、令和5年11月にブラジル連邦共和国で開催された「ブラジル香川県人移住110周年記念式典」、パラグアイ共和国で開催された「パラグアイ県人会創立50周年記念式典」等に出席し、祝意を表するとともに、移住された方々の労苦に対し敬意を表し、より一層絆を深め、友好親善関係の強化を図り、青年交流や県内企業の進出、県産品の販路拡大などの促進、本県のPR等について、引き続き御協力をお願いするために、両国を訪問しました。

この機会に、香川県から南米に移住された方々の歴史、そして現在に至る県人の活躍についてご紹介したいと思います。

(1) 移住の背景等

南米においては、戦前より日本政府の移民政策で多くの方々（全国で103万人（海外移住資料館HPより））が移住されています。うち本県から移住した方々は8,535人（「香川の国際化データブック」より）です。

ブラジル移住の歴史を例にすると、1908年（明治41年）の笠戸丸移住以降、大正末頃まで、日露戦争後の海外発展熱や農村の過剰人口対策と不況が重なる環境の中、北米への移住制限がなされる一方で、ブラジルでのコーヒー園労働者需要の高まりから、サンパウロ州の渡航費助成制度も相まって、コーヒー農家の農業契約移民としての移民から始まりました。



1930年代 入植当時の木の風呂桶
(チエテ移住地、ブラジル)



1957年 豚油とり(チャベス移住地、パラグアイ)



1962年 2年目のコーヒー

ブラジル移住の最盛期は、大正末から昭和16年頃までです。この頃は、日本はいわゆる昭和恐慌の最中であり、深刻な農業不況に見舞われていました。政府はこれを打開するべく海外渡航費全額補助制度を創設するなど、不況の打開策を移住に求めました。県下でも昭和3年（1928年）に、知事を組合長とする香川県海外移住組合が設立され、農業移民の促進を図りました。

第2次大戦で一旦途絶えた移住は、国交回復により、再び進められることになりました。植民地

を含む領土の45%を失い、外地からの引揚者等600万人以上の日本への流入を受け、産業基盤が脆弱で、受入れ困難と見た日本政府は、渡航費の貸付を行うなど、積極的に移民を南米に送り込みました。

本県でも1953年に香川県移住協会（会長：金子知事）が設立され、翌年には本格的な送り出しを行うため、同協会副会長が南米各国を訪問、移住県民の慰労や実情調査を行いました。この結果、55年に県人移住者名簿が作成され、県移住協会ブラジル支部（現ブラジル県人会）が設立されたのです。



移住船内のレクリエーション

（ぶらじる丸：赤道祭－赤道を通る際に安全を祈願して行われる儀式的なお祭り）



昭和40年頃 移住船さくら丸内の様子（食堂）



昭和40年頃 移住船さくら丸内の様子（寝台）



金子知事夫妻媒酌による岩清尾八幡宮での合同結婚式



昭和48年 金子知事がパラグアイ大統領を表敬訪問
(大統領と握手する初代パラグアイ県人会長 笠松尚一氏)

(2) 県人会の皆さんの県への思いと協力

こうした移民の方々は、言葉の壁と想像以上に過酷な環境の中での労働、差別や偏見等を受け、また、戦時中は日本語禁止や強制退去といった苦難や、敗戦時には、いわゆる勝ち組、負け組の移住者内での紛争など、大変な御苦労をされてきました。

そのような中にもかかわらず、県人会の皆様方には、ふるさと香川への思いを持ち、郷土のためにと、イベントに参加し、本県のPRを無償で行ったり、海外進出を検討している県内企業に快く協力等いただいています。こうした皆様方からの周年行事への御招待に応え、参加することにより、積年の御労苦に対し敬意を表し、より一層絆を深め、友好親善関係の強化を図るとともに、青年交流や県内企業の進出、県産品の販路拡大などの促進、本県のPR等について、引き続き御協力をお願いしたいと考えています。



昭和53年6月18日 ブラジル移住70周年記念式典
(海外移住者だより第15集より)

「フェスティバル ド ジャポン・サンパウロ」の様子



FUNFAN展 in ラ・コルメナ市 (パラグアイ) の様子

